

Special Essay

論文の投稿先選び

免疫・免疫治療学講座 溝口 充志

PubMed は日本でも多くの研究者・臨床医に浸透していますが、PubMed Central については余り浸透していない印象を受けています。欧米では公的資金を受けた研究による論文は、すべての国民が読む権利があると位置付けています。すなわち国民全員が論文を無料で読めるようにしなくてはならないという事です。このために数年前より欧米で既に実用化されているシステムが PubMed Central です。例えば、米国の政府機関である National Institute Health (NIH) からグラント（研究助成金）を一部でも受けた研究に関する論文は、すべて出版後 1 年して PubMed Central に寄贈しなくてはなりません。そして国民が PubMed Central を通して、その論文を無料で読むことができるというシステムです。したがって、欧米の多くの学会機関紙や high impact journals では、投稿時に NIH のグラント番号を記入すると、出版日からちょうど 1 年目に論文を PubMed Central に自動的に寄贈してくれます。一方、この様なサービスをしてくれない雑誌に投稿した場合は、NIH から PubMed Central に寄贈するように催促が来ます。もし PubMed Central に寄贈しなければ、毎年行わなければならないグラントの更新ができなくなります。研究者にとっては死活問題ですので出版社と交渉しなくてはなりません。この様な事務的に面倒な交渉を行う研究者は殆どいないと考えられます。何故なら、もう一つ非常に簡便な方法があるのです。研究者が「その論文は peer-reviewed ではない」と宣誓すれば PubMed Central への寄贈は免除されるのです。すなわち、この様な雑誌は “Non peer-reviewed journals” と公的にレッテルを貼られて行くことになります。もうすぐ日本版 NIH が設立され、同様のシステムが導入されることが強く示唆されます。実際、J-Stage が PubMed Central の役割を日本で担い始めています。ですから、今後の論文の投稿先として、海外への投稿の場合は Open-access journals または 1 年後に論文を自動的に PubMed Central に寄贈してくれる journals、そして国内の投稿の場合は Kurume Medical Journal の様に J-Stage に自動的に寄贈してくれる journals を選ぶのが無難かもしれません。